

「やさしさ」から「慈愛」へ

私たちは、困っている人を見つけると、自然に助けたいという気持ちが起こってきます。それは自分の中に慈愛の心が宿っているからです。あなたの心のやさしさに目を向けてみましょう。



“手助けしてあげたい” 気持ち

大きな荷物を手に持ち、苦勞して階段を上っているお年寄り——

車道に飛び出そうとしている

幼子——

自転車ごと倒れて痛そうにう

ずくまっている子ども——

困っている人や危なげな子ども

を見たとき、私たちは“手助け

してあげたい”という思いが、とっ

さに湧いてくるでしょう。それは私た

ちのごく自然な気持ちです。

今回は、私たちの誰もが持っている、こうした心情について考えてみましょう。



「ぼくも そんな人に なりたい」

やさしいおまわりさん

十川^{そがわ}和樹^{かずき}（小学二年生・徳島県阿波町）

その日ぼくはいつものようにくさで道をぺんぺんしながら家に帰っていた。そこへおじいさんが自転車でよろよろしながら来た。

「あぶないなあ」

あたりそうになつてよけたぼくは、そう思つておじいさんの後ろすがたを見ていた。するとそこへ一台のパトカーがむ

こうからやつて来た。

「大じょうぶかなあ」

せまい道なのでぼくはちよつと足を止めて見ていた。おじいさんは自転車からおりて歩いて坂をのぼりはじめた。きつとこぐ力がなかつたんだろうと思つた。

すると、パトカーのおまわりさんがおりてきて、おじいさんの自転車をもつておじいさんのかわりに自転車をおしてあげていた。

下り坂になるところで自転車をわたして少しおじいさんに話しかけたあと、パトカーにもどつて何ごともなかつたようにまたゆつくりと車を走らせていった。





遠くでこのようすを見ていたぼくはな
んだか心がほんわりとした。次の日もそ
次の日もぼくはおまわりさんがパト
カーからおりて来ておじいさんの自転車
をおしてあげているすがたが目によきつ
いてはなれなくなっていた。あのすがた
がわすれられなくなっていた。

「あたりまえのことをしただけと思っ
ているんじゃないのかな」

おまわりさんのすがたが頭からはなれ
ずお母さんに話すと思いがけない答えが
返ってきた。

「あたりまえのこと？」

「そう。あたり前のこと。おまわりさん
はそういう人が多いのよ」

とお母さんにはっこりして言った。

ぼくはそんな心のあつたかいおまわり

さんがぼくの町にいてくれてうれしいな
と思った。そして、「あたりまえのこと」
がしぜんにできるおまわりさんは、やさ
しくて強くてすごいと思う。

ぼくもそんな人になりたいなと思った。

（「第11回全国小学生作文コンクール」（国家公
安委員長賞）、平成15年2月15日付『読売新
聞』）

少年は、やさしいおまわりさんの姿を
見て、心がほんわりとしました。そし
て、その姿が忘れられなくなりました。

少年の心にあるやさしさが引き出さ
れ、同時に「ぼくもそんな人になりた
い」という人間像の目標ができたので
しよう。

見返りを 求めない心

「惻隱そくいんの心は仁の端たんなり」（『孟子』）とい
う言葉があります。

人の苦境を見て、惻あわれみ隠いたむ心、助けて
あげたいと思う心は、仁じん愛あいの心、慈じ愛あい
の心の糸口であるという孟子の言葉です。

例えば、よちよち歩きの子どもが川に
落ちそうになっているとき、それを見た
人は、われを忘れて駆かけより、子どもを
助けようとするでしょう。落ちたらいけ
ない。何とかがしてあげなければ。とい
う気持ちで、とつさに湧わいてくるからで

す。

そのときの心は、子どもの親からお礼を言われたいとか、世間の人にほめられたいとか、また助けなければ周囲から非難されるから、というわけではありません。まさに、見返りを求めない心です。これを無償の心といいます。無償の心は慈愛の表れといってもよいでしょう。

つまり、私たちは、誰もがこの慈愛の心を宿しているのです。つまり、やさしさは慈愛の心の芽生えといえます。

しかし現実には、人にやさしく、親切にするよりも、自分にとって損か、得かを考えて行動したり、人を不公平に扱ったりすることが多いのではないのでしょうか。

このように私たちの心は、良くもはた



らき、悪くもはたらくという二面性を持つています。だからこそ、やさしさを発揮して、自分の心に宿っている慈愛の心を大きく育てていくことが大切です。

そのための日々の心づかいや行いが、道徳といえるでしょう。

この町を 好きにさせた “おばあちゃん”

道徳とは何も特別なことをすることではありません。思いやりの心にもとづく、日常の小さな行いを積み重ねることです。

次に紹介するのは、中国・西安市から、大学の留学生として日本にやってきた郝妍さんの体験です。

私は日本での生活を何回も夢で想像した。見知らぬ世界経済の大国の豊かさに期待しているのと同時に、不安もいっぱいだった。

こういう複雑な気持ちを抱えて、日本の国土に踏み出したが、私はすぐにこの町が好きになった。(中略)

それは、ある夜のことだった。道に迷った私は、たまたま通りかかったおばあさんに、寮(大学の学生寮)への道を尋ねた。とても信じられないことに、おばあさんは「こんな遅い時間、お一人だけ送ら危ないよ。ばあさんが送ってあげるよ」と言ってくれた。

私は、おばあさんの好意に甘えて無事に寮に着いたが、一人で暗い夜の中に消えていったおばあさんの後ろ姿を見て、目が潤んでしまった。私の



安全を心配したおばあさんは、自分の帰り道が怖くないのだろうか。



日本人の人情の冷淡を蔑む中国人には、顔の見知らぬ外国人のことで、わざわざ面倒臭がらずに世話をする人はいるだろうか。(中略)

私の日本人に対する不安は、この町に住むというだけで消えてしまった。この町は私に勇気を与えた。

(「留学生の目に映る町の人々」 柏南ロータリークラブ)

人は、人のやさしさにふれて、自分のやさしさを引き出されるものです。慈愛の心の芽生えは、困った人がいたら助けてあげたいと思う心です。そうしたやさしきは、多くを語らなくても、結果として、相手の心から感謝の心を引き出すのです。

増田敬太郎の生き方

やさしさをよりいっそう發揮していくと、慈愛の心にまで広がります。見返りを求めない無償の心で、人々のために尽くした生き方は、長く人々の心に刻まれるでしょう。

私たちは、そうした生き方を先人から学ぶことができます。

明治二十八年（二八九五年）、増田敬太郎（熊本県水村出身）は、警察官になる夢を抱いて佐賀県警察学校に入りました。そして優秀な成績で卒業し、佐賀県唐津警察署に赴任しました。

当時、日本では伝染病であるコレラが各地で流行っていました。佐賀県の高串地区（現在の肥前町）も例外ではなく、コレラが猛威を振るっていました。





高串地区では、この事態に対応できる
 駐在巡査の応援を求めました。このと
 き、増田巡査が抜擢されたのです。増田
 巡査はすぐに引き受け、唐津から山越え

をして高串地区に向かいました。

増田巡査はさつそく地区のようすを調
 べ、区長らとコレラ対策を立てました。

高串の人々は病気に対する恐怖心は強い
 もの、コレラの知識はあまり持つてい
 ませんでした。そこで増田巡査は、みず
 から先頭に立って患者の家を消毒した
 り、薬の飲み方を教えたり、患者との接
 触を禁止したりしました。また、生水を
 飲んだり、生のままの魚介類を食べない
 よう指導して回りました。

しかし、そうした増田巡査の懸命の努
 力にもかかわらず、手遅れの患者が薬を
 飲んで死んだことがきっかけで、「毒薬を
 飲まされている」といううわさが広まり
 ました。治る見込みのある患者まで「毒
 は飲まない」と言い出す始末です。

増田巡査は根気よく人々の誤解を解いて回る一方、コレラで亡くなった人の遺体をたった一人で背負い、対岸の丘の上にある墓地に埋葬しました。病気がうつることを恐れて、村人が遺体を運ぶことを拒むようになったからです。

こうして不眠不休で取り組む増田巡査の疲れもピークに達しました。コレラは増田巡査の体に容赦なく襲いかかり、とうとう倒れてしまいました。

「このようになっては、自分の回復の見込みはないと覚悟しています。しかし高串のコレラは、私が全部背負っていきますから安心してください。村人たちは、私が指導したように看病と予防をしつかりやるように伝えてください」

死の間際、このような遺言を残した増

田巡査は、ついに帰らぬ人となりました。増田巡査、二十五歳、警察官になって七日目、高串に来てわずか四日目の出来事でした。



世紀を超えて語り継がれるもの

増田巡査の遺体は、翌日、村人によって火葬されました。村人は深い悲しみに包まれました。その後、コレラは徐々に収まり、村には再び穏やかな日々が戻ってきたのです。

増田巡査の献身的な姿に心を揺り動かされた村人は、増田巡査の遺骨を分けてもらい、地元の秋葉神社の境内に埋葬しました。

それ以後、増田巡査は、住民から「増田さま」と呼ばれて慕われ続けました。そして昭和十二年（一九三七年）、秋葉神社の社殿の改築が行われた際、増田巡査の

御霊も合祀され、名称も増田神社と改められました。

こうして、村人を守った増田巡査の偉業は、地元の人々によって、今日もなお語り継がれているのです。

（参考Ⅱ「増田敬太郎物語」肥前町企画振興課）

今日、佐賀県肥前町では、毎年、増田巡査が葬られた七月二十六日に近い日曜日に、増田巡査をしのいで「増田神社夏祭り」が行われています。

祭りは、漁船による海上パレードや佐賀県警の音楽隊によるパレード、花火、



出店など。そして坂道の多い町内を、百数十人の子どもたちが引いて練り歩く山笠の飾りは、敬礼姿で白馬にまたがる「増田さま」なのです。

「今日の高串があるのは、増田さまのおかげです。その遺徳を私たちは決して忘れません」

そう語る地元の人々の言葉は、増田巡査に対する感謝の心が、世紀を超えて語り継がれ、今に受け継がれている証といえるでしょう。

増田敬太郎は職務を全うしたばかりか、人々の救済のために献身的な働きをしました。その慈愛に満ちた尊い姿が、人々の心を強く揺り動かしました。

無償の心は永遠のいのちとして生き続けています。

時代を 超える価値

今日、子どもたちの問題行動は、日本の大きな課題になっています。しかし、それは子どもたちだけの問題ではなく、むしろ、子どもたちに生きる姿を見せてきた大人の責任ということもできません。

慈愛の表れである無償の心は、わが身を犠牲ぎせいにすることだけをいうものではありません。私たちの誰もが持っている「人の役に立ちたい」という素直な気持ちも、無償の心の表れです。この心情をよりよく発揮すれば、真に自分を生かすこ

とにつながっていきます。

自分さえよければ、自分たちさえ楽しければよいという自分中心の心を見直して、日々の暮らしの中で、身近なところからやさしさを発揮していくことが、結果として、次の世代に対する生き方の模範ほんとなってくるのではないのでしょうか。

慈愛の心とそれにもとづく生き方は、時代を超え、世代を超えた、私たちに共通する大切な価値です。

私たちは、自分の心に宿っている慈愛の心をあらためて見つめ、そのはたらきの価値に気づくとともに、その心を大いに発揮していきたいものです。

そのことが、よりよい自分づくり、温かい思いやりで満たした社会づくりにつながっていくでしょう。

おめ
ごとう
ご家族の
皆さん
慈愛の心は
健全です
ますます
発揮して
ください
ね



kien